

## 論文

## 南方熊楠と『ノーツ・アンド・クエリーズ』誌

‘Footprints of Gods, &amp;c.’から「ダイダラハウシの足跡」へ

志村 真幸

## はじめに

南方熊楠(1867-1941)は前半生をアメリカとイギリスで過ごし、学術的な執筆活動についても、『ネイチャー』(1893年に初掲載)、『ノーツ・アンド・クエリーズ』(以下、『N&Q』と略記)』(1899年に初掲載)で開始している。日本語で執筆を始めるのは帰国後の1904年のことであり、熊楠の論考執筆のスタイルは海外時代に形成されたといえる。

このうち『ネイチャー』への投稿については、比較的良く研究されてきた。<sup>1</sup> 雑誌自体の著名さ、熊楠が最初に投稿した雑誌であることなどが理由として挙げられる。しかし、『N&Q』掲載論考についての研究は、『ネイチャー』掲載論考との関係、初掲載論考の検討にとどまり、<sup>2</sup> ほとんど手が触れられずにきた。ところが、『ネイチャー』掲載論考は合計でも50本であり、1914年には途絶えてしまうのに対し、『N&Q』掲載論考は324本にもおぼり、投稿も晩年の1933年まで続いた。それにもかかわらず、研究されてこなかったのは、論考の内容が雑多であるほか、この雑誌の特殊な性格が壁となったものと思われる。『N&Q』は読者投稿による質疑応答の雑誌であったため、熊楠の論考だけを読んでいても内容が理解できない。前後の質問や応答(筆者の調査では合計で約1500本になる)と合わせての分析が必要なのである。

しかしながら、熊楠研究において『N&Q』は重要な意義を持つ。第一に、英文論考と日本語論考との関係を考えるに欠かせない。日本語論考には、英文論考を翻訳したり、そこからふくらませて書かれたものが少なくない。内容や用いる文献にも共通性が認められるのである。しかし、詳細な調査はご

く一部を除いて行われておらず、研究の必要がある。現在、『N&Q』掲載論考のうち180本あまりに日本語の論考や書簡等との関係が判明しているが、これは熊楠研究において見落とすことのできない数字であろう。そのなかから本稿では‘Footprints of Gods, &c.’と、帰国後に書かれた最初の民俗学的な日本語論考「ダイダラハウシの足跡」を取り上げ、両者を比較・検討したい。

熊楠の日本語論考を見るのに『N&Q』が欠かせないことは、帰国後の両誌への投稿数の違いからも明らかである。『ネイチャー』掲載50本のうち、在英時に書かれたものは38本、帰国後は12本となる。これが『N&Q』では在英時16本、帰国後308本なのである。さらにいえば、これは掲載された本数であり、実際には不掲載/未掲載に終わった論考も多数ある。こちらも『ネイチャー』では5本だけだが、『N&Q』では現在確認されているものだけでも70本以上になる。<sup>3</sup> 帰国前後に『ネイチャー』から『N&Q』への移行があったのは間違いなく、『N&Q』初期投稿の検討は大きな意味を持つのである。なお、補足しておくならば、両誌とも1932年末まで定期購読を続けている。<sup>4</sup>

第二に取り上げたいのは、熊楠の執筆スタイルの問題である。従来、熊楠の日本語論考は、話題がきわめて広汎で、しかも連想のように飛躍・展開していくのが、魅力でもあり、読みにくさでもあると評価されてきた。熊楠の文章は、現在の目から見れば、とても論文とは見えない。一方で、英文論考は形式として整っていることが指摘される。<sup>5</sup> しかし、このことは『ネイチャー』の主要な論考には当てはまるが、『N&Q』の場合にはかならずしも適合しない。むしろ、『N&Q』の論考は、内容の雑多さ、考察・分析の欠落という点で日本語論考との類似性を持つ。内容や使用文献だけでなく、スタイルという点でも比較検討しなければならないのである。なおかつ、そのスタイルは熊楠のみに限らず、他の投稿者による『N&Q』掲載論考と共通する点があると考えられる。ここから熊楠の文章の淵源に迫れるのではないだろうか。

そして、第三点である。これまで『ネイチャー』や『N&Q』は、熊楠が論考を発表するための場としてしか位置づけられてこなかった。しかし、一方的な関係だけ見ては不十分である。両誌は、論考執筆のための情報収集の

場として機能したのではないか。この点についても‘Footprints of Gods, &c.’と「ダイダラハウシの足跡」から考えてみたい。

さらに加えて、『N & Q』は日本の民俗学の出発においても少なからぬ意味を持つ。熊楠が柳田国男や高木敏雄に協力して1913年に創刊された『郷土研究』は、最初の民俗学専門誌と位置づけられる。そのモデルのひとつが『N & Q』であり、実際に『N & Q』を真似た質疑応答欄が設けられるなどしたのである。熊楠は手探り状態であった日本の民俗学に、欧米の最新の方法論や研究成果を伝える役割を果たしたが、その際に選ばれたのが『N & Q』だったのである。熊楠と『N & Q』の検討により、日本における民俗学の原点を明らかにすることが期待される。

## 1 『N & Q』

まず、『N & Q』について簡単な説明をしておきたい。現在では英文学の専門誌として知られる同誌だが、そのようになったのは1960年代以降のことであり、以前は文学、民俗、歴史、語源、人類学、動物学、植物学などの総合誌であり、投稿者も研究者とアマチュアが入り混じっていた。

『N & Q』は、1849年11月3日、貴族院の文書館に勤務するウィリアム・ジョン・トムズによって創刊された。トムズは民間の習俗や迷信、行事、俗謡などの総称として「フォークロア」の語を生み出した人物であり、『N & Q』はそれらの情報収集、質疑応答のためにつくられたのであった。

『N & Q』の特徴は、全頁が読者投稿で埋め尽くされていることにある。誌面は「ノート」、「クエリー」、「リプライ」の3つの欄に分けられる（創刊～1920年代）。ノートは知識や情報を提示するもので、現在の学術論文に近いものから、ごく簡単に事例を挙げたものまで多様である。クエリーは、読者から広く情報を求める問いかけのことで、短文が多い。リプライは、クエリーへの返答であり、長短さまざまであった。ノートにリプライが付くことも多い。リプライは1本だけでは終わらず、数十人から寄せられることもあった。何年にもわたってリプライが続くこともしばしばで、先行するリプライへの訂正が行われたり、議論となることも少なくない。もちろん、まったくリプライの付かないクエリーもある。熊楠は中山太郎宛書簡（1926年1月

30日付）で『N & Q』のことを「随筆問答雑誌」<sup>6</sup>と表現しているが、現在のインターネット上の掲示板を想像してもらったのが分かりやすいかも知れない。熊楠のデビューした1899年6月3日号を例として見れば、ノート20本、クエリー23本、リプライ41本の合計84本が掲載されている。ひとりで複数の論考を載せているケースもいくつかある。

論考の長さはさまざまで、数頁に及ぶものもあるが、大部分は十数～数十行程度の短いものであった。一般に、情報を簡潔に示すスタイルで執筆され、羅列的という表現がぴったりくる。考察や分析がきちんといわれることはまれである。この点も『N & Q』の特筆すべき点といえよう。情報源は書物・雑誌・新聞が中心であり、自身の体験や伝聞も混じっている。書誌情報の提示は徹底されている。熊楠の論考も、こうした『N & Q』のスタイル、またノート、クエリー、リプライの網のなかで理解しなければならないのである。

創刊当初から第二次大戦後まで週刊（第一次大戦後期に一時月刊化）、本稿で扱う19世紀末には各号20頁であった。当時、購読期間は一年間と半年間があり、年間購読料は1ポンド6ペンス、半年では10シリング3ペンスであった。

投稿者の多くはイギリス人であるが、アメリカ人、フランス人も相当数おり、そのほかのヨーロッパ諸国、またイギリスの海外植民地からの投稿（イギリス人が大部分、現地人も少数）も少なくなかった。アジアからの投稿者もインド人を中心に初期から見られるが、大量の投稿を長期間にわたって継続したのは熊楠が最初である。熊楠に次ぐ日本人投稿者は佐藤彦四郎で、1924-38年に27本が掲載されている。第二次大戦後は斎藤勇（たけし）、荻田庄五郎（いずれも1951年）など英文学者による投稿が見られるようになる。

## 2 熊楠の在英時の投稿について

本節では熊楠の『N & Q』への投稿開始と、その内容についておおまかに確認しておきたい。

熊楠が『N & Q』への投稿を始めたきっかけについては、現在、まだ明らかになっていないが、『ネイチャー』以外に論考発表の場を求めていたところ、フォークロア・ソサエティーの重鎮であり、『N & Q』の投稿者でもあったG.

L. Gomme に紹介されたと考えられている。投稿を始めるのは簡単で、予約金を払って購読者になれば良い。ただし、熊楠の最初期の購読料支払いについては確認されていない。日記から支払いが確認されるのは1902年以降である。<sup>7</sup>

熊楠の日記に初めて『N & Q』への言及があらわれるのは、1898年2月2日のことである。<sup>8</sup> 大英博物館で閲覧し、のちの「燕石考」につながる論考を発見したと書かれている。これは同時期に作成された「ロンドン抜書」37巻のメモからも確認される。しかし、次の記述は1899年6月3日、「予の文(A Witty Boy 外一) Notes and Queries に出居る」<sup>9</sup>と、自分の論考が初めて掲載されたことへの言及になってしまう。投稿・執筆の過程は書かれていないのである。

しかしながら、『N & Q』投稿にいたった動機や背景については、当時執筆意欲が高まっていたこと、『ネイチャー』への投稿が雑纂的になっていたことなどが指摘されている。<sup>10</sup> なかでも大きかったのは、フォークロア的なものへの関心の高まりであり、そのために『N & Q』が新たな投稿先として選ばれたものと考えられる。また、『N & Q』デビュー以降は、『ネイチャー』への投稿が自然科学・技術分野に絞られていく。

さて、「A Witty Boy 外一」とあるように、熊楠は‘A Witty Boy’(ノート)それから「外」に当たる‘The Invention of the Gimbal’(クエリー)の2本で『N & Q』にデビューした。なお、署名は「Kumagusu Minakata 7, Effie Road, Walham Green, S. W.」とされている。

‘A Witty Boy’はイタリアと中国に類似の説話があることを示している。まず、14-15世紀の物語作家サケッティとポッジョから、賢い子どもにやりこめられた大人が、神童といわれるような子どもでも大人になれば馬鹿になるものだと嫌味を言ったところ、子どもに「あなたも子どもの頃はたいへんな知恵の持ち主だったのでしょ」と逆にへこまされる話が引用され、つづいて同様の例が、五世紀の劉義慶『世説新語』から紹介される。ここで熊楠は「こうした話の発明で、中国人がヨーロッパ人よりも早かったことを記しておく面白いのではないか」<sup>11</sup>と述べている。

‘The Invention of the Gimbal’は、ジンバルの発明について問い合わせたものである。これには編集部が熊楠の文章に続けて、1577年には記述があると

回答しており、リプライは付かなかった。ジンバルとは航海に用いられる器械で、コンパスやクロノメーターを水平に保つための十字型をした吊り下げ装置である。これについても、熊楠には東西比較の意図があったのではないかと考えられる。というのも、『日本及日本人』(1922年9月15日号)掲載の短文「廻り香炉と扇風機」のなかで、『西京雜記』から廻り香炉の発明の記事を引き、「これは英話にいわゆるジムバルの創製は支那人に出た証拠で、今日船舶用の羅鍼盤のジムバルははるか後に欧州へ伝わったのだ」<sup>12</sup>と述べているからである。

この2篇に共通するのは、東西の比較である。熊楠にはイギリス人投稿者には扱いつらい中国語や日本語の文献を渉猟することが可能で、まさにこの点に『N & Q』における熊楠の独自性と存在意義があったといえる。こうした手法は帰国後の投稿でも継続されていくことになる。

初掲載に気を良くしたのか、熊楠は翌4日に‘Walrus’(クエリー、6月24日号)を、さらに7日には‘Beaver and Python’(ノート、7月8日号)と‘Swim-Shell’(クエリー、7月22日号)を投稿している。それ以降、1900年9月1日、ロンドンを阿波丸で出航するまでの一年数ヶ月で計16篇が発表されることになる。‘Chinese Medicine’(リプライ、7月1日号)‘The Wandering Jew’(ノート、8月12日号、8月26日号、1900年4月28日号)‘Flying Cups’(ノート、1900年2月24日号)など、説話学・民俗学・人類学にかかわる論題が多い。この期間に不採用/未掲載となった投稿はない。

最初期には『ネイチャー』論考の焼き直しなども見られるが、次第に書き分けが行われるようになり、また『N & Q』的なテーマや形式についても身につけていく。当初はクエリーやノートを出してもリプライが付かなかったのだが、次第に議論として盛り上がるようなものが増えていく。そして帰国直前、集大成として書かれたのが‘Footprints of Gods, &c.’であった。

### 3 ‘Footprints of Gods, &c.’

本節と次節では、在英時の投稿から‘Footprints of Gods, &c.’を取り上げ、前後のノートやリプライの内容を確認し、それらが帰国後の日本語論考へどのように発展していくか分析することにしたい。‘Footprints of Gods, &c.’を

対象とするのは、これが充実した内容を持ち、前後の質疑応答とも関係が深く、在英時を代表する論考と位置づけられるからである。また、熊楠が帰国後に続報を出し、日本語化に取り組んでいる点からも彼の関心の高さがうかがわれる。なお、これは一般に「神跡考」として知られる論考である。

‘Footprints of Gods, &c.’は、神、預言者、歴史上・想像上の著名人などが岩上に残した足跡を扱った論考である。冒頭部分から引用すれば、「北米・パイストーン石切場の端には、「グレート・スピリット」の足跡が岩上に残されており、まるで巨大な鳥の足跡のようである。古代メキシコの神々の祭では、穀物粉をまいた上にテスカトリポカの足跡があらわれ、神々の到来を示す合図となるとされた。ピエドライトによれば、チブチャ人のあいだで、諸法典をつくり、糸紡ぎと織物の技術を創始した神と信じられるチミサパグアの足跡を印した岩がコロンビアにある。サウジーは聖トマスの足跡がブラジル・バイアの海岸に残されているという。ペルーにも同じ聖人の足跡があり、スペイン人の来訪以前から信仰されていたと記録がある」<sup>13</sup>と事例が列挙されていく。そして世界各地に共通の現象であると指摘され、祖先信仰との関連、故人の移し身としての足跡などのアイデアが提示される。膨大な数の文献が引用され、無数の事例が挙げられた、いかにも熊楠らしい論考である。

この論考は1900年7月5日に投稿され、9月1日号、9月22日号、10月27日号の3回にわたって分載された。熊楠がイギリスを離れた、まさにその9月1日に出たわけである。熊楠は帰国後にも続報を投稿している。1903年5月9日号掲載の‘Footprints of Gods, &c.’(リプライ)と、1904年7月23日号掲載の‘Footprints of the Gods’(ノート。これのみタイトルが微妙に異なるが、熊楠が編集部への誤記であろう。ほかにも例がある)である。さらに1907年6月28日にもリプライを投稿したことが日記から確認されるが、これは未掲載に終わっている。

日記から執筆の経緯をたどると、まず1900年2月2日に「朝、家居、仏足石のことしらべる。」<sup>14</sup>と執筆に向けて材料を集め始めている。さらに3月23日に「九時二十分より『ノーツ・エンド・キリー』へFoot-outlineのこと起稿す。」<sup>15</sup>と原稿執筆に取りかかる。4月1日には、「六時より『ノーツ・エンド・キリー』へ状認む(Foot-outlines as Records of Pilgrimage or Visit)。」<sup>16</sup>と

あり、当初はこのタイトルで執筆されていたことが分かる。5月13日には「夕に至り「仏足石論」草稿成る。夜、深更迄訂正す。」<sup>17</sup>と草稿が完成、6月5日に、「朝、早起、「仏足石」浄書畢る。一時五十五分也。(引用書、和三一、漢一三、英二八、仏五、伊二、独四、西二、梵三、羅一、合計八九。)」<sup>18</sup>と一応の完成を見る。引用文献が89点にのぼったことから明らかなように、非常に長大な論考であった。そして、巽孝之丞に草稿チェックをしてもらい、<sup>19</sup>7月5日に『ノーツ・エンド・キリー』への状出す。「仏足石論」也。」<sup>20</sup>と投稿に至る。5ヶ月あまりをかけ、ようやくの完成であった。

さて、3月23日には「Foot-outline」、4月1日には「Foot-outlines as Records of Pilgrimage or Visit」と記されているが、これは掲載タイトルの‘Footprints of Gods, &c.’とは異なっている。実は「Foot-outlines as Records of Pilgrimage or Visit」とは、1899年10月14日号掲載のF. W. Greenによるノートのタイトルで、熊楠の論考はもともとこれへのリプライとして書かれたのであった。タイトルが違うため、この点はずっと見過ごされてきたが、熊楠の‘Footprints of Gods, &c.’を理解するには、先行するGreenらの議論を含めて検討しなければならないのである。Greenのノートには大きな反響があり、12月2日号にはWilliam Crookら5人からのリプライが載り、また編集部から「このほかにも非常に多くの同じ内容のリプライがあった」<sup>21</sup>ことが注記されている。

しかしながら熊楠は執筆を進めていくなかで、無数の事例を集め、独自の視点を持ち込んでいく。そのことで自信を得たのか、タイトルを改め、ノートとして投稿することになったのである。ただし、9月1日号掲載分の冒頭には、Greenらを参照せよとの一文が入っている。<sup>22</sup>

さらに熊楠以降についても確認する必要がある。熊楠のノートに対して、1900年11月17日号にはC. C. B. から、翌1901年3月23日号にはIbagueからのリプライが出るのである。また1903年2月14日号にはWilliam E. A. Axonの‘Footprint of the Prophet」と題するノートが掲載される。これにも熊楠らを見よとの注記がある。<sup>23</sup> Axonのノートには、3月21日号でEdward Peacockによるリプライが付いた。

以下、この一連の論考(1899-1904年)について、どのような事例が示されているか見ていきたい。事例の羅列のようではささか煩雑であるが、これは

もとの論考自体がそうだからである。各論考には、A～Oの番号を振った。

- A. 1899年10月14日号 F. W. Green 'Foot Outlines as Records of a Pilgrimage or Visit' ノート  
ケントのグードハースト教会の塔の屋根には、多数の巡礼者の足形を鉛板に刻んだものがある。巡礼の証として、足跡を刻む習慣は広く見られ、エジプトではアメンホテプ3世の寺院にある。同様の例を教えて欲しい。すでに分かっているのは、エルサレムのオマール・モスクのムハンマドの足跡、シナイ半島にあるムハンマドのラクダまたは口バの足跡、インドからイギリスに持ち帰られた足形。世界に共通して見られるのは、原始的なアイデアはどこも同じだからか。
- B. 1899年12月2日号 William Crook 'Foot Outlines as Records of a Pilgrimage or Visit' リプライ  
ヘロドトスの記録にあるエジプトのペルセウスの足跡、オランダ・スバの聖人の足跡、ポロウデイルの悪魔の足跡、アイルランドの魔法の牛の足跡、セイロンのアダムズ・ピークにある仏陀の足跡、オークニー諸島の聖マグヌスの足跡、南米のケツアルコアトル、インドの聖なる牛の足跡などを列挙。さらに『人類学雑誌』、『N & Q』の古い号、人類学者のタイラーの研究なども紹介。
- C. 1899年12月2日号 Donald Ferguson 'Foot Outlines as Records of a Pilgrimage or Visit' リプライ  
セイロンのアダムズ・ピークにある仏足石がもっとも有名。
- D. 1899年12月2日号 Lobuc 'Foot Outlines as Records of a Pilgrimage or Visit' リプライ  
教会の屋根の鉛板に足形を刻むのは古くからの習慣。ポケットナイフで簡単にできる。
- E. 1899年12月2日号 J. T. F. 'Foot Outlines as Records of a Pilgrimage or Visit' リプライ  
リンカンシャーのウィンタリングム教会に、詩人H. K. ホワイトの名を刻んだ足形。
- F. 1899年12月2日号 Thomas J. Jeakes 'Foot Outlines as Records of a Pilgrimage or Visit' リプライ

大英博物館のインド部門に巨大な足跡を刻んだ石がある。ブライトンのデヴィルズ・ダイクにあるのは、トーバーに上陸したウィリアム三世の足跡か？

- G. 1900年9月1日号 南方熊楠 'Footprints of Gods, &c.' ノート  
タイラーから北アメリカのパイプ・ストーン石切場の「グレート・スピリット」の足跡、メキシコのテスカトリポカ神、コロンビア、ブラジルのバイアに聖トマスの足跡、『人類学雑誌』からフランスの古代遺跡、スウェーデンの古代遺跡、ドナウ川にヘラクレスの足跡、パリやローマのキリストや聖人のもの、エジプトのオシリスに捧げられた足跡、ベチユアナランドでの祖先信仰、オリーブ山のキリストの足跡、セイロンの仏足石、玄奘の記したインドのもの、インドの聖トマス、タイ、サモア、ビルマ、ラオス、ニュージーランド、大和は「山の跡」の短縮形、ダイダラハウシの足跡、弁慶、役行者、曾我五郎の足跡。
- H. 1900年9月22日号 南方熊楠 'Footprints of Gods, &c.' ノート  
垂迹を足跡の一種と見なす、若狭彦の神の足跡、高句麗王の馬の足跡、母が巨大な足跡を踏んで生まれたという伏羲、中国では鳥の足跡から漢字がつくられた、黄河の治水にまつわる足跡、道教にまつわる足跡、ラサのポタラ宮、中国越州の如来の足跡、動物の足跡。
- I. 1900年10月27日号 南方熊楠 'Footprints of Gods, &c.' ノート  
東洋の足跡への信仰、高貴な人の踏んだ場所の扱い、手形や足形を証文などに利用すること、先人の業績などを「足跡」という、足跡は人間や動物の神秘的な分身と考えられた、メラネシアで近親の足跡を踏まない、イタリアで患者の足跡を使って治療する、ドイツで敵の踏んだ芝生を乾かすことで敵を倒す、足跡を身分証明に使う、仏陀の足の裏の印。
- J. 1900年11月17日号 C. C. B. 'Footprints of Gods, &c.' リプライ  
偉人の足跡の近年の例としてはイプワースのウェズレーのものがある。
- K. 1901年3月23日号 Ibagué 'Footprints of Gods, &c.' リプライ  
スペインの初期布教者のサン・ルイ・ベルトランがコロンビアの岩に足跡を残した。
- \* 編集部が、マレー博士の戯曲『アンドロマケ』で、テティスとその神殿の近くに足跡を残す例を紹介。

- L. 1903年2月14日号 William E. A. Axon 'Footprint of the Prophet' ノート  
インドに、イスラムの預言者が岩の上に足跡を残した例がある。
- M. 1903年3月21日号 Edward Peacock 'Footprint of the Prophet' リプライ  
ロバート・サウジーがオランダのスパの近くで聖Rの足跡を見たところ  
が、聖レマクルのことか？
- N. 1903年5月9日号 南方熊楠 'Footprints of Gods, &c.' リプライ  
『栄華物語』、靴への信仰、プルタルコス。
- O. 1904年7月23日号 南方熊楠 'Footprints of the Gods' ノート  
中国で花嫁の足跡を踏む風習、茄子の豊作のために足跡を付ける。

実に多くの事例が挙げられている。イギリスを初めとするヨーロッパ諸国から、インドやエジプトに広がり、南米なども目に付く。Green や Crook に人類学的な視点が見られるのも特徴だろう。投稿者の素性については一部が判明している。Ferguson は大学の研究者、Green、Axon、Peacock はアマチュアだがフォークロア集などを出版している。

応答関係の全体を見ていくと、いくつかの特徴が浮かび上がる。まず、事例の積み重ねという点である。さまざまな地域や時代から事例が報告されていき、集積された情報によって徐々に岩の上の足跡という現象が明らかになっていく。また、熊楠以外は分析や考察を加えていない点も注目される。あくまで事例の羅列なのである。これらは、『N & Q』という雑誌の意味と目的を明らかにしてくれる。すなわち、情報の収集こそが重要なのであり、投稿者の研究発表の場ではなかったのである。

次に熊楠の論考について、先行論考との関係を見てみたい。明らかになったのは、熊楠が先行する論考で挙げられた文献を使っていることである。Crook がBで示したタイラーや『人類学雑誌』が引用されている。ただし、Crook の引き写しというわけではなく、きちんと原典に当たり、詳細に内容を紹介している。とはいえ、このことから分かるのは、日記にあった89点もの引用文献も、すべてを熊楠が独自に見つけてきたわけではなく、少なくとも一部は先行論考から教えられたということである。これが熊楠の『N & Q』利用の第一段階となる（第二段階は日本語論考化）。

Crook が『N & Q』の古い号を挙げている点も指摘しておきたい。熊楠は

こちらでもチェックしているのである。実は「足跡」の話題が『N & Q』で盛り上がるのは、今回が初めてではなかった。1865-66年にも 'Human Foot-prints, etc., on Rocks' として出た話題だったのである。こちらは1865年11月25日号のH. C. のノートに始まり、11本のリプライが付いている。テーマは1899-1904年とまったく同一であり、挙げられる事例も重複するものが多い。こちらについても内容を紹介しておきたい。各論考には、～の番号を振った。

1865年11月25日号 H. C. 'Human Foot-prints, etc., on Rocks' ノート  
マドラス南方のサン・トメは聖トマスが上陸した地とされ、近郊に足跡がある。セイロンのアダムズ・ピークにも人間の足跡が残っている。パラダイスを追放されたアダムが地上に降り立った場所という。岩に付けられた足跡にまつわる伝説が、イギリスやアイルランドにもあるか？

\* 編集部がアダムの足跡への巡礼の記事を紹介。

1866年1月13日号 John S. A. Cunningham 'Human Foot-prints, etc., on Rocks' リプライ

スライゴアの農夫が玄関の敷石にしていた石には、真ん中に人間の足跡が刻まれている。アイルランドでは、後継者選びのときに初代族長の足を彫った石を使う。

1866年1月13日号 C. Durndell 'Human Foot-prints, etc., on Rocks' リプライ  
聖アウクスチヌスがリッチバラ港から乗船したときの足跡が岩に残っている。

1866年2月10日号 P. Hutchinsor 'Human Foot-prints, etc., on Rocks' リプライ  
マルタ島に聖パウロの足跡の付いた岩。ウィリアム3世がトーバーに上陸した際に付けた足跡。

1866年2月10日号 J. T. F. 'Human Foot-prints, etc., on Rocks' リプライ  
ウェズレーの足跡が、リンカンシャーのイプワースにある彼の父親の墓石に。ウェズレーが説教壇を拒否して説教したときに付いた。

1866年3月17日号 D. 'Foot-prints on Stones' リプライ  
ウェズレーのはもうない。

1866年4月7日号 J. T. F. 'Footprints on Stones' リプライ

D. のは間違い。自分はイプワースを良く知っていて、墓石も何度も見

ている。夏に再確認に行くつもり。

1866年4月7日号 J. M. H. 'Footprints on Stones' リプライ  
ローマの聖セバスチアヌス教会に、クオ・ヴァディスのときのキリストの足跡。

1866年6月2日号 Cyril 'Footprints on Stones' リプライ  
ヨークシャーのフード・ヒルにある巨大な黒岩の真ん中に足跡があり、「悪魔の足跡」と呼ばれている。

1866年7月14日号 Golundauze 'Human Foot-prints on Rocks' リプライ  
ソロモンの宮殿跡に建てられたオマール・モスク。大天使ガブリエル、ムハンマドの足跡、彼のラクダの足跡。エジプト、アラビア、ダマスカスにもムハンマドの足跡。

1866年9月8日号 J. T. F. 'Human Foot-pints on Rocks, etc.' リプライ  
ウェズレーについて再調査してきた。7月に現地に見に行ったが、足跡はあった。拓本も取ってきた。

1866年10月13日号 H. C. 'Human Footpints, etc., on Rocks' リプライ  
アイルランド南部アハドー大聖堂近くの岩に2つのくぼみがある。聖なる修道士が200年も跪きつづけたためという。

こちらでは、ウェズレーの足跡を巡って議論になったのが特徴である。情報の積み重ねと訂正、再確認が行われているのが分かる。各論考で挙げられている事例は1899-1904年と重なるものが多いが、その範囲はヨーロッパからアラビア、インドまでであり、また人類学的視点は見られない。これは時代性であろう。こちらの投稿者については良く分かっておらず、Hutchinsonがアンティカリとして何冊か著作を残しているのが確認されるのみである。J. T. F. は1898-1904年の際にも論考を寄せている。

では、この2回の議論を受けて、熊楠はどのような日本語論考を執筆したのか。まずは帰国後の執筆活動の全体について触れておきたい。

日本に戻った熊楠が最初に発表したのは、1902年7月17日号の『ネイチャー』に掲載された 'Pithophora Oedogonia' であった。その後も『ネイチャー』、『N & Q』への投稿が続き、初めての日本語論考は、1904年7月の『東洋学芸雑誌』21巻274号に出た「ホトトギスについて」、「本邦産淡水生紅藻につい

て」、「梅について」の3本となる。<sup>24</sup> いずれも生物学をテーマとしている。それからまた日本語での活動は途絶してしまい（英文論考についても一時的な中断がある）再開されるのは1907年10月の『東洋学芸雑誌』24巻313号に「ペストと鼠の関係」と「桜の記」が掲載されてからとなる。さらに、いわゆる文系の論考としては、1908年4月の『東洋学芸雑誌』25巻319号に出た、「言葉のかずかず」、「ダイダラハウシの足跡」、「幽霊に足なしということ」が初めてとなる。なお、この時期も依然として英文がほとんどで、日本語が熊楠の活動の中心となるのは1909年7月以降となる。

さて、「ダイダラハウシの足跡」だが、これはまさに 'Footprints of Gods, &c.' を日本語に書き直したものであった。しかし、たんなる翻訳ではない。しかも、みずからの論考5本だけではなく、他の投稿者によるノートやリプライからも材料が取られているのである。この点について、以下、検証していきたい。

#### 4 「ダイダラハウシの足跡」

「ダイダラハウシの足跡」は、日本中にダイダラハウシという巨人の足跡が残されていることから語り起こし、ヨーロッパ、アフリカ、アジア、アメリカなどの類例を並べた論考である。平凡社全集版にして4頁という短いもので、「Footprints of Gods, &c.」に比べてはるかに簡略化されている。分析や考察が削ぎ落とされ、事例の羅列というスタイルが徹底されているのである。

執筆の経緯をたどると、1908年3月18日の日記に「臥内ダイダラハウシの事を調べ。」<sup>25</sup> と出てくる。そして23日には早くも「ダイダラハウシの足跡、草しおはる。」<sup>26</sup> と草稿が完成、28日には「榎本勝多状一（東洋学芸雑誌への投書。言葉のかずかず、ダイダラハウシの足跡、幽霊に足なしといふ事、三条）」<sup>27</sup> と他の2本とともに投稿に至る。構想から完成までわずか10日である。「Footprints of Gods, &c.」に5ヶ月かかったのとは大違いだが、これも英文の材料を日本語にまとめ直したただけだからであろう。また、掲載内定後の4月26日の日記には、「ダイダラハウシの足跡」に16種の引用文献を用いたことが記されており、<sup>28</sup> 英文にくらべると大幅に少なくなっていることも分かる。

本文では、導入部でダイダラハウシについて触れたあと、「八年前の拙著『神跡考』(Kumagusu Minakata, "Foot-Prints of Gods, etc.," in Notes and Queries, 9th ser., vi, 1900, pp. 163-165, 223-226, 322-324)」<sup>29</sup>と、自身の『N & Q』掲載論考をもとにしたことが明記されている。

さて、「ダイダラハウシの足跡」には、『N & Q』論考がどのように使われているのか。まずは本文から簡単に見ておきたい。「八年前...」の直後には、「支那の史乘に、大沢中に巨人の跡を履みし婦人が、たちまち伏羲、また棄を孕めりとあるは、あるいはかかる窪穴の、実に地上に存せしに基づける旧伝にもあらんか。(サウゼイの『一八一五年秋和蘭遊記』に、スパ付近にルマクル尊者の足跡あり、婦女妊を欲する者詣りてこれを踏む、とあるは石に彫り付けたるなり)」<sup>30</sup>とある。伏羲については熊楠の書いた論考Hから、ルマクルも投稿者名は挙げられていないが、CrookのBとPeacockのMから取られている。「ダイダラハウシの足跡」は、このように切り貼りで作られた論考だったのである。

以下、取り上げられている事例を順番に示し、その出典を「A」～「O」、「」～「」で示したい。分かりやすくするため、熊楠の『N & Q』掲載論考については、特別に「熊H」、「熊I」とした。『N & Q』には見られない材料は「新」とする。

ダイダラハウシ「熊G」、タイラーから丘の窪地「B」、盗賊の大將軍大太郎「新」、伏羲「熊H」、スパの聖ルマクル「BM」、八ヶ岳「新」、サモア「熊G」、黄河「熊H」、タイラーから動物「B」、アダムズ・ピーク「BC熊G」、エルサレムのオリーブ山「熊G」、エルサレムのムハンマド「A」、インドのムハンマド「L」、薬師寺「新」、中国・越州「熊H」、高麗「熊H」、ポタラ宮「熊H」、タイの仏・ゾウ・トラ「熊G」、インドの聖トマス「熊G」、ドナウ川「熊G」、ヘロドトス「B」、ベチュアナランド「熊G」、コロンビア「熊G」、ニュージーランド「熊G」、ハワイ「熊G」、教会の鉛板「ADE」、エジプトの足形「A」、ウィリアム三世「F」、韓非子「新」、足跡への信仰「熊I」、先人「熊I」、オーストラリア「新」、『人類学雑誌』「B」、フランスの遺跡「B」、スウェーデンの遺跡「熊G」、メラネシア「熊I」、ドイツでの敵「熊I」、イタリアの治療法「熊I」、アイルランドの首長「」

弁慶「熊G」

こうしてみると、熊楠のG、H、Iをもとにしながら、CrookのBにもかなり頼り、JeakesのFやCunninghamの、などの論考も随所で取り上げられていることが分かる。ただし、1865-66年のものはあまり用いられていない。すべての論考をチェックしたわけではないのかも知れない。ウェズレーについて言及がない点も注目される。新しすぎる点が敬遠されたのだろうか。また、おおまかにいえば、イギリスの事例は他の投稿者から引き、その他の地域については自身の論考をもとにしている。

以上から明らかになったのは、「ダイダラハウシの足跡」は、自身の論考を中心しつつ、前後のノートやリプライの内容を取り込んで執筆されたということである。もちろん、これを盗用だなどというつもりはない。むしろ、こうした二次的な利用にこそ『N & Q』の存在意義があったのではないだろうか。

なお、こうした例は‘Footprints of Gods, &c.’と「ダイダラハウシの足跡」に限られず、多くの論考で確認されるものである。たとえば「ダイダラハウシの足跡」と同時に投稿した「言葉のかずかず」にはWatsonの『N & Q』掲載論考‘Richard Pincerna’(リプライ、1904年7月30日号)が引用され、「幽霊に足なしといふ事」は熊楠自身の‘Lithuanian Folk-lore: Legless Spirits’(リプライ、1908年1月11日号)を原型として、さらにPlatt, Jun.(クエリー、1904年8月31日号)とRatcliffe(リプライ、1904年10月5日号)の論考が取り込まれている。テーマが足ということで、‘Footprints of Gods, &c.’も用いられている。

以後の日本語論考でも『N & Q』は使われつづけ、いくつか例を挙げるなら、‘Single Tooth’(クエリー、1903年6月20日号、ノート1907年3月16日号)は、「一枚歯 - 歯が生えた産れ児」として日本語化され、『人類学雑誌』(30巻11号、1915年11月、31巻1号、1916年1月)に掲載されたが、このなかにはForshaw(リプライ、1903年7月25日号)やMorgan(リプライ、1908年7月25日号)の寄せた論考が取り込まれている。‘Extracting Snakes from Holes’(ノート、1913年8月2日号)は、「蛇を引き出す法」『民俗』(1年2報、1913年9月、2年2報、1914年4月)および「蛇に関する民俗と伝説」『太陽』(23巻1、2、6、14号、1917年1、2、6、12月)となり、W. F. Prideaux(リブ

ライ、1913年8月30日号)とFirebrace(リプライ、1913年8月30日号)が用いられている。熊楠の日本語論考は『N & Q』と切っても切り離せない関係にあることがわかる。

## 結 論

第一に指摘したいのは、「ダイダラハウシの足跡」が『N & Q』誌面からの切り貼りで書かれている点である。この論考では、各地に共通する現象があることを示すことが意図された。そのためには世界中から事例を引いてくる必要がある。確かに熊楠は日本語と中国語はもちろん、英語、フランス語、ドイツ語などの書物も自在に扱うことができた。それでも、個人で目を通せる文献の数、集められる事例には限りがある。しかも、帰国してしまった熊楠には、西洋の文献を自由に扱うことができない。そのために他の投稿者による論考が使われたのではないか。『N & Q』の誌面はいわば素材の集積場であり、そこから取捨選択・整理して書かれたのが「ダイダラハウシの足跡」だったのである。

次に熊楠の文体について取り上げたい。最初に述べたとおり、熊楠の文章は羅列的であり、テーマが連想的に飛躍するのが特徴とされる。「ダイダラハウシの足跡」は、まさにそのとおりである。こうした特徴は『N & Q』の誌面に似ているのではないか。地域や時代の異なる事例が列挙され、リプライが続くなかで対立する意見が出ることすらある。それは誌面では仕方ない。執筆者がひとりではないからだ。何人もの投稿者による多数の論考によってひとつのテーマが語られているのである。それを1本の論考にまとめようとした場合、よほどの意志と工夫がなければ、統一的な視点や論理性でまとめられるものではない。熊楠がしたような事例の切り貼りだけでは、なおさらである。

あるいはむしろ、熊楠は積極的に『N & Q』的であろうとしたのかも知れない。競合者のいない日本で、新しい学問である民俗学を始めようとしていた熊楠は、ひとりで『N & Q』を再現しようとしたのだとも考えられる。日本人読者に民俗学的研究の実例を示すには、それが手っ取り早い方法と思われるのだろう。また、『N & Q』によって執筆スタイルを身に付け、『N & Q』

掲載論考の書き直しによって日本語での執筆を始めた熊楠には、もはやほかの書き方はできなかった可能性すらある。熊楠が書くものは、すべからく『N & Q』に似たものになってしまったのかも知れない。

そして第三点として、熊楠が『N & Q』を自身の論考を発表する場としてだけではなく、材料収集にも使っていた点が明らかになった。そもそも当時の『N & Q』は、現代の学術誌とはことなり、完成した論文を掲載する場ではなかった。誰かの役に立つであろう事実を報告したり、自分の欲しい情報を求めたり、質問に答えたりする雑誌だったのである。当然、そこで得られた情報は自由な利用が許される。現在の研究者の感覚からすると違和感があるかも知れないが、こうした場が19世紀末のイギリスに存在したことは無視できない。近代的な研究者があらわれ、最初から最後までオリジナリティが必須とされるようになる以前の知的世界と位置づけられるのではない。

情報の利用は一方通行ではない。熊楠だけが得をしたのではなく、彼が『N & Q』に寄せたノートやリプライが、他人の研究や著作に利用されることもあった。この側面についてはほとんど研究が進んでいないが、熊楠が『ネイチャー』に寄せた「The Antiquity of the “Finger-Print” Method」(1894-96年)に関しては、いくつかの例が指摘されている。<sup>31</sup> また、A. Collingwood Leeが1909年に出版した*The Decameron; its sources and analogues*には、熊楠の『N & Q』掲載論考「The Envied Favourite」(1904年12月14日号)が名前を挙げて言及されている。<sup>32</sup> あるいは熊楠が「ダイダラハウシの足跡」で投稿者の名を挙げていないように、熊楠が提供した情報も、彼の名を出さないまま使われている可能性がある。それらについては、今後の詳細な研究を待つしかない。『N & Q』誌上の情報や知識は誰かの専有物ではなく、投稿者/読者の共有財産だったのである。本稿だけで結論が出せるわけではないが、19世紀イギリスの知を取り巻く背景として指摘しておきたい。

『N & Q』的な知的世界は、日本では『郷土研究』によって引き継がれる。詳しくは別稿で改めて論じたいが、民俗学という学問には、全国から広く情報を収集する必要がある。現在ではフィールドワーク、聞き取り調査を行うのが普通だが、当初は研究者も少なく、方法論も確立されてはいなかった。一方で、近代化によって伝統文化は急速に消失しつつあった。そこで考えられたのが、地方の情報提供者の創出と組織化だったのである。全国の教員や

知識人に呼びかけ、各地の慣習や民話について報告してもらおう。のちに柳田国男が大々的に行う方法だが、それを最初に実践したのが『郷土研究』であった。通信者から寄せられた原稿を掲載し、質疑応答欄では必要なテーマについて広く募集する。そうすることで、全国からの情報の結節点として機能したのである。それはまさに『N & Q』的な空間であり、ここから日本の民俗学は出発したのであった。日本の民俗学を考えるうえでも『N & Q』は見落とせない存在なのである。

本稿では、熊楠在英時の『N & Q』への投稿について確認し、さらに‘Footprints of Gods, &c.’と「ダイダラホウシの足跡」の比較から、熊楠の論考執筆のスタイルへと迫った。熊楠は日本人という強みを生かして東洋の事例を『N & Q』に報告し、西洋と対比することで独自の地歩を得た。しかし、東西比較という視点は事例の収集を必要とするため、他の投稿者による論考が利用され、そのなかで熊楠の日本語での執筆スタイルもつくられていったのであろうと考えられる。しかし、それは熊楠だけではない。『N & Q』は19世紀イギリスの知的世界のあらわれであり、熊楠もそのなかで再考されるべきなのである。

## 注

1. 熊楠の著作は、英語/日本語を問わず、論考と呼ばれることが多い。現在の学術的な論文とは、あまりにもスタイルが異なるためである。  
『N & Q』掲載論考については、平凡社全集版をテキストとして使用した。  
『N & Q』誌上では、誤植や脱字がしばしば見られる。また熊楠自身が手元に届いた掲載号に訂正・加筆していることも少なくない。平凡社全集は、これらを反映した校訂版となっている。  
日本語論考、書簡についても、平凡社全集版を使用した。  
日記については、平凡社全集版、八坂書房版を参照の上、適宜、原資料に確認した。  
『N & Q』の巻号数については、原則として発行日を示した。
2. 『南方熊楠英文論考〔ネイチャー〕誌篇』飯倉照平監修，集英社，2005年の解説。  
田村義也「イタリア古説話との出会い - 南方熊楠の『ノーツ・アンド・クエリ

ーズ』誌第一投稿をめぐって」『ユリイカ』40巻1号，2008年。

雲藤等「南方熊楠の和文論文の役割 - 和文論文外部記憶装置説の試み」『熊楠研究』6，2004年，25-27頁。

『N & Q』と日本についての研究としては下記が挙げられる。

宮澤眞一「Notes & Queriesの日本関係記事にみる日英交流の推移」『埼玉女子短期大学研究紀要』4，1993年。

また現在、『南方熊楠英文論考〔ネイチャー〕誌篇』に続き、『〔ノーツ・アンド・クエリーズ〕誌篇』を翻訳中である。2010年出版予定。

3. 『N & Q』への投稿はすべてが掲載されたわけではない。不掲載と未掲載の二種類があり、不掲載は、既出、誌面に合わない等の理由で掲載を拒否されるもの。熊楠については、現在、1本のみが確認されている。未掲載は、誌面のスペースに余裕がなく、掲載を見送られるもの。重複した、あるいは時機を逸したりプライに多い。当座は見送りとなっても、投稿から半年～数年後に出た論考もある。熊楠について見れば、1904-1910年は特に多く、投稿の半数近くが未掲載となった時期もある。その後は購読者の激減によって、投稿総数が減ったため、未掲載論考が少なくなる。
4. いずれも1933年度分の予約金不払いのため、雑誌送付が打ち切られている。この年に購読をやめた理由については、体調の衰え、経済的事情などが考えられているが、まだ明確な理由は分かっていない。
5. 雲藤，前掲，25-27頁。
6. 『南方熊楠全集』別巻1巻，平凡社，1974年，549頁。
7. 上松翁宛書簡（1925年12月3日付）など、のちの熊楠の文章には、『N & Q』の特別寄稿家として予約金なしで投稿していたようなことが書かれているものがある。しかし、これは嘘か誇張のようである。少なくとも1902年以降は継続して予約金を払い込んでいることが確認される。
8. 『南方熊楠日記』2巻，八坂書房，1987年，49頁。
9. 同書，105頁。
10. 『南方熊楠英文論考〔ネイチャー〕誌篇』326-327頁。
11. 『南方熊楠全集』10巻，1973年，93頁。
12. 『南方熊楠全集』5巻，1972年，410頁。
13. 『南方熊楠全集』10巻，107頁。一部、省略した。

14. 『南方熊楠日記』2巻, 138頁。
15. 同書, 147頁。
16. 同書, 148頁。
17. 同書, 155頁。
18. 同書, 158頁。
19. 同書, 162頁。巽は横浜正金銀行ロンドン支店に勤め、和歌山出身者人脈を通して熊楠とも親交があった。巽孝之「シャーロック・ホームズの街で - 小泉信三、南方熊楠、巽孝之丞」『三田文学』94号, 2008年, 77頁。
20. 『南方熊楠日記』2巻, 163頁。
21. *Notes & Queries*, 22 December 1899, p. 464.
22. *Ibid.*, 1 September 1900, p. 163.
23. *Ibid.*, 14 February 1903, p. 126.
24. 『東洋学芸雑誌』は、1881年に『ネイチャー』を手本とした創刊された総合学術雑誌であった。
25. 『南方熊楠日記』3巻, 1988年, 166頁。
26. 同書, 167頁。
27. 同書, 168頁。
28. 同書, 174頁。
29. 『南方熊楠全集』3巻, 1971年, 10頁。
30. 同書, 10頁。
31. 『南方熊楠英文論考 [ネイチャー] 誌篇』124-140頁。
32. A. Collingwood Lee, *The Decameron; its sources and analogues*, 1909, p. 234. ただし、「Mr. Kumagusa Minakata」と誤記されている。

附記 本稿は平成20年度南方熊楠研究奨励事業（若年研究者助成事業）による研究成果の一部である。